

目 次

はじめに	1
I 昭和54年度のあゆみ	2
II 管理運営概要	
1. 組 織	4
2. 予 算	5
3. 入館状況	6
III 事業概要	
1. 常 設 展	
(1) 刀剣コーナー	7
(2) 視覚障害者コーナー	8
2. 特 別 展	
(1) 濃飛の先史時代	9
(2) 世界 の 貝	11
(3) 濃 飛 の 文 人	13
3. 資料紹介	
(1) 土人形と中国の仏像	15
(2) 帰 化 植 物	16
4. 資料調査・収集活動	
(1) 人 文 部 門	17
(2) 自 然 部 門	19
5. 教育普及活動	21

は じ め に

昭和51年5月に岐阜県の自然と歴史の総合博物館として開館して以来、本年で5年目を迎えるにいたりました。この間、生涯教育の一翼を担う社会教育機関として、一步一步前進してきましたが、博物館活動も量・質とも徐々に充実の度を加えてきました。今まで県内にうずもれていた文化財を発掘して、その成果を特別展として公開し、好評を博してきました。また、見るだけでなく、参加する博物館を目指して、教育普及の各種行事を開催してきましたが、その数は年を追って増加し、また内容は多岐にわたってきています。

日曜日になると家族連れがたくさんやってきて楽しそうに展示に見入っています。また、中には熱心に質問をする人もいます。こうした光景を見ると職員一人一人がより一層魅力的で、身近な博物館を目指して努力しなければならないと痛感します。

ここに昭和54年度の活動記録をまとめた館報第3号をお届けします。御意見、御希望などお気づきの点がありましたら博物館へお寄せください。

博物館は県民のみなさんのものです。時代に対応する開かれた博物館にするべく、創造と工夫を凝らし、いつでも新鮮な内容を準備していくつもりです。今後とも御理解と御協力を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

昭和55年7月

岐阜県博物館長

大橋 桃之輔

I 昭和54年度のあゆみ

開館4年目を迎え、真に生涯教育の場としての今日的課題を基に、郷土の総合博物館としてのあり方を再認識し、単に“展示を見学する博物館”から、“楽しく学べる博物館”、更には“参加する博物館”へと志向して地道な努力を積み重ねてきた。

春4月の特別展「濃飛の先史時代「縄文土器と石器の神秘」」は、郷土に出土した縄文時代の遺物約150点の展示をとおして、日本人の祖先である縄文人の姿や心をさぐり求めることとした。

夏の特別展「世界の貝」は、陸貝をはじめ、日本近海及び世界に生息する貝を中心に標本約1,000種、3,000点、パネル及び生体等約50点を展示した。

秋には、幕末に活躍した郷土の詩人梁川星巖をはじめ先人の遺墨、遺品等約110数点を「濃飛の文人」として特別展示した。

また、11月には、全国で初めての試みである「視覚障害者コーナー」を常設展示の一環として設置し、縄文土器等30数点を触察によって理解できるように展示して大きな反響を呼んだ。

資料紹介としては、12月に中国六朝時代の石仏、唐宋時代の仏頭及び可児町等に伝承された土人形などを「土人形と中国の仏像」として、3月には県下の「帰化植物」をわかりやすく紹介した。

教育普及活動としての主催事業を前年度の「自然観察会」、「体験学習会」のほか、新しく「自然教室」、「標本の名前を調べる会」、「人文教室」を開催した。

なお、従来学芸員の調査・研究の成果は、そのつど「館報」、「だより」等に発表してきたが、本年度「岐阜県博物館調査研究報告」第1号として発刊した。

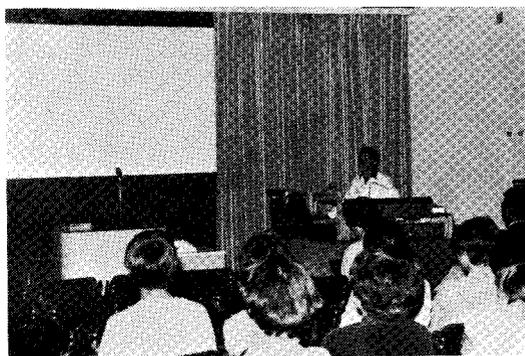
日誌抄

4・1 人事異動

退職	次長兼総務課長	水間 紀彦
	業務嘱託	松岡 芙蓉
転出	主任主査兼管理係長	鷺見 照男
	主査	酒井田 卦市
	主事	戸田 昭子

主事	木野村 弘
教育普及係長	鷺見 峯男
学芸嘱託	木野村 恭一
転入 次長	杉本 稔
総務課長兼管理係長	西村 義郎
主事	宮西 武彦
主事	久保 友子
主事	古田 信彦
業務嘱託	山本 佳代子
業務嘱託	加藤 由紀子
教育普及係長	鈴木 正太郎
学芸嘱託	国光 溢夫
学芸嘱託	宮野 伸也

- 4・1 「博物館だより」第8号発行
- 4・10 在ブラジル連邦共和国県人会一行来館
- 4・15 40万人目入館 記念品贈呈
- 4・27 特別展「縄文土器と石器の神秘」開幕
- 5・7 害虫駆除
- 5・10 国連地域開発センター国内研修
- 5・12 東海北陸副出納長会一行来館
- 5・13 「岐阜県野鳥保護のつどい」開催
- 5・20 「縄文譜を聴く会」開催



- 5・20 岐阜県博物館協会総会
- 5・27 特別展「縄文土器と石器の神秘」閉幕
- 5・30 日本博物館協会館長会議に館長出席
- 5・31 日本博物館協会総会に館長出席
- 6・2 東海北陸6県教育長会議一行視察
- 6・3 鹿児島県青年団体一行来館
- 6・8 総理府島村統計局長来館

6・14 文部省伊田助所課長補佐視察
 6・17 自然教室開催
 6・21 東海地区博物館連絡協議会総会
 福島県教育委員会青柳文化課長視察
 6・27 全国公平委員会一行来館
 6・28 長野市千野教育管理部長視察
 7・1 「館報」第2号発行
 「博物館だより」第9号発行
 7・5 文部省小林特殊教育課長補佐視察
 7・7 岐阜大学社会教育主事講習生研修
 7・13 東海北陸検察庁検事一行来館
 7・15 サイパン・マリアナ高校生一行来館
 7・20 福島県議会議員一行視察
 7・21 特別展「世界の貝」開幕
 7・27 立教大学博物館学研究室生一行来館
 8・3 文部省横山給与係長視察
 8・10 体験学習会「土人形の色付け」開催
 8・21 工業技術院地質調査所磯見次長来館
 8・26 「標本の名前を調べる会」開催
 8・29 自治省柳交付税課長視察
 8・31 特別展「世界の貝」閉幕
 9・2 オイスカ台湾研修生一行視察
 9・5 東海地区都市施設課長会議一行来館
 9・18 害虫駆除
 9・20 第27回全国博物館大会に学芸部長出席
 9・30 中華人民共和国軽工業代表団視察
 10・12 特別展「濃飛の文人」開幕
 10・14 ブラジル連邦共和国サンパウロ州モジ
 ・ダス・クルーゼス市会議長一行視察
 10・23 大蔵省理財局国庫課江藤係長来館
 10・24 宮崎県議会議員一行視察
 10・28 人文教室開催
 10・31 警察庁山崎首席監察官一行来館
 11・2 福島県議会議員一行視察
 11・4 広島県立美術館友の会会員来館
 11・7 岐阜県博物館協議会開催
 東海4県市長会一行視察
 11・8 文部省社会教育局山本視聴覚課長視察
 11・11 自然観察会「百年公園の自然観察」開催
 11・12 東海3県博物館協会交流研究会
 11・13 上記会員視察
 文部省社会教育局轟木専門職員視察

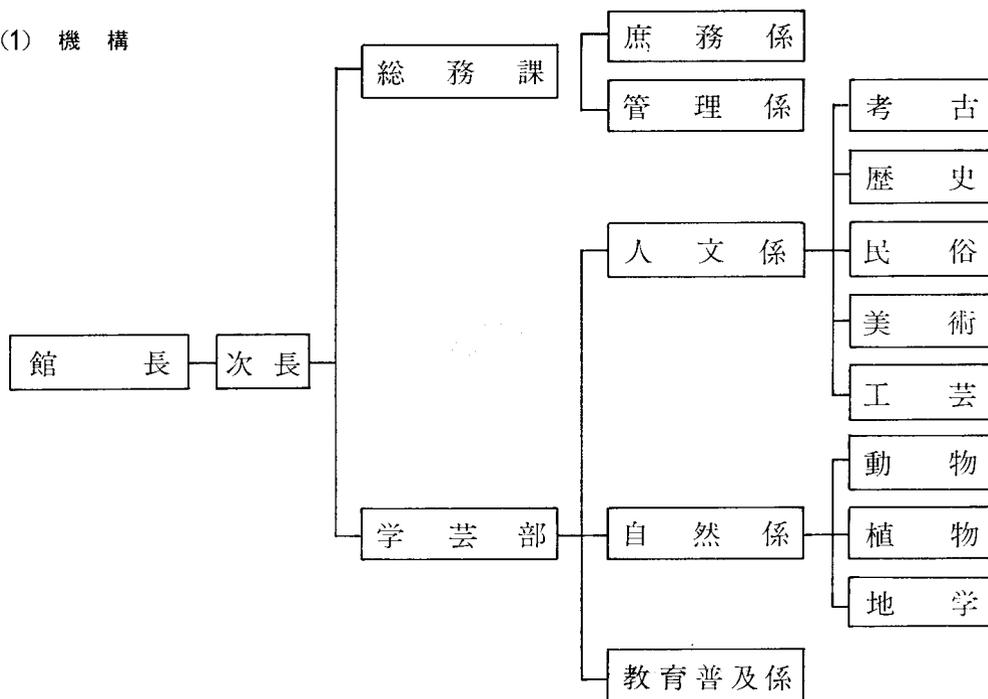


11・14 特別展「濃飛の文人」閉幕
 11・16 東海北陸地方課長会議一行視察
 11・24 害虫駆除
 11・29 「視覚障害者コーナー」開設
 12・8 三重県教育委員長井文化課長視察
 12・18 資料紹介「土人形と中国の仏像」開催
 1・21 文化庁半沢技官視察
 1・22 国立近代美術館滝沢氏視察
 1・24 栃木県博物館建設準備班長視察
 1・25 岩手県博物館建設事務所長視察
 国土庁大都市圏整備局吉村計画官視察
 1・29 国立民族学博物館小林普及係長視察
 1・30 大蔵省理財局地方資金課諸橋氏来館
 2・2 静岡県議会議事務局長来館
 2・14 岐阜県博物館協議会開催
 2・15 東海地区県造園緑化協会会議
 2・19 栃木県総合企画室船橋主幹来館
 2・22 東海農政局一行来館
 2・28 館内消防訓練実施
 3・1 資料紹介「帰化植物」開催
 「調査研究報告」第1号発行
 3・4 鹿児島県立博物館君付次長視察
 文部省体育局大島事務官来館
 自治大学校秋田副校長来館
 3・5 建設省都市局公園緑地課笹倉係長来館
 3・8 農林水産省構造改善局原課長補佐来館
 自治省財政局日置課長補佐来館
 徳島県立博物館朝日次長視察
 3・21 害虫駆除
 3・24 長野県文化財保護協会会長視察
 3・25 新潟県文化行政課近藤副参事視察
 3・26 県新規採用職員研修実施

Ⅱ 管理運営概要

1. 組織

(1) 機構



(2) 職員

昭和55年4月1日現在

職名	氏名	職名	氏名
館長	大橋 桃之輔	○ 学芸部	
次長	丹羽 遙	学芸部長	吉田 藤太夫
○ 総務課		主任学芸主事兼人文係長	宮川 貞一郎
課長	西村 義郎	学芸主事	二村 智一
主任主査兼庶務係長	村地 昭義	〃	水野 部一
主事	宮西 武彦	〃	堀部 山泰
〃	久保 友子	〃	横山 康夫
技師	高島 利次	主任学芸主事兼自然係長	山田 芳雄
(兼) 管理係長	西村 義郎	学芸主事	安藤 三郎
主事	仙石 勉	〃	笠原 芳雄
〃	古田 信彦	〃	小野 木三郎
業務嘱託	岩田 節子	学芸嘱託	小宮 野三郎
〃	白井 真由美	教育普及係長	宮鈴 正太郎
〃	大野 晴美	教育主事	佐野 正隆
〃	桑原 栄子	学芸嘱託	国光 正溢
〃	加藤 由紀		
〃	大西 早苗		

(3) 博物館協議会委員 (アイウエオ順)

◎印……会長 ○印……副会長

昭和55年5月15日現在

氏名	住所	現職
奥村保	岐阜市加納鉄砲町	岐阜県公民館連合会会長
幸脇多聞	岐阜市青柳町4-57	岐阜県高等学校長協会会長
坂倉又吉	羽島市竹鼻町2733	千代菊(株)取締役社長
小牧愿	岐阜市城田寺1108	岐阜県中学校長会会長
玉田幸人	岐阜市萱場町中越599-11	岐阜日日新聞社専務取締役
○土屋齐	大垣市荒尾町1077	(株)大垣共立銀行取締役頭取
野村忠夫	稲沢市下津町東国府34	岐阜大学教育学部教授
◎林金雄	各務原市那加雲雀町37	大垣女子短期大学教授
深井重三郎	岐阜市鏡島西菖蒲池1621	学校法人佐々木学園理事長
和田三里	岐阜市鷺山若水町1丁目	岐阜県小学校長会会長

2. 予 算

(単位千円)

区分	年度		昭和52年度	昭和53年度	昭和54年度
	内 訳				
入	国庫支出金		—	—	800
	博物館使用料		12,308	10,936	8,652
	雑入		265	244	165
	合計		12,573	11,180	9,617
歳	博管理 物運 館費	運営費	20,401	21,840	22,386
		施設管理費	61,544	63,571	62,778
		博物館協会費	205	209	236
		計	82,150	85,620	85,400
	出	博物 館事 業費	常設展示費	10,635	10,628
特別展示費			5,505	6,000	6,000
資料収集管理費			1,100	1,200	1,250
教育普及活動費			800	850	2,100
計		18,040	18,678	32,579	
合計		100,190	104,298	117,979	

3. 入館状況

今年度の入館者総数は88,969人、年間開館日数297日より算出すると1日平均 299人であった。

月別入館状況は下表のとおりであるが、5・10・11月の3か月間で全体のほぼ半数を占めている。1日の最高は5月5日（こどもの日）の2,658人であり、ゴールデンウィークの入館者は12,022人を数え、年間総数の13%を記録した。

団体入館者を見ると432団体、36,511人で年間

総数の41%にのぼるが、月別では10月が最も多く、団体入館者総数の28%を占めている。更にこれを県内・県外別にみると県内が344団体、26,470人で全体の約70%を占めるが、県外では愛知県が圧倒的に多く、26%を記録した。

特別展の入館状況については、通算開催日数91日間に入館者は48,929人を数えた。これを1日平均にすると537人で、年間のそのほぼ2倍である。また総数をみても全体の半数以上にのぼり、特別展の吸引力がはつきりとうかがえる。

○ 博物館入館者数

月別	小中生	高大生	一般	計	開館日数	1日平均
4月	3,732人	342人	4,345人	8,419人	26日	323人
5月	6,932	2,438	8,239	17,609	26	677
6月	2,117	955	3,475	6,547	26	251
7月	1,108	415	2,988	4,511	26	173
8月	3,372	302	4,931	8,605	27	318
9月	2,400	124	3,975	6,499	24	270
10月	9,816	1,279	3,546	14,641	25	585
11月	6,436	583	3,484	10,503	24	437
12月	607	81	1,184	1,872	22	85
1月	509	63	1,065	1,637	22	74
2月	488	99	1,620	2,207	24	91
3月	2,424	231	3,264	5,919	25	236
合計	39,941	6,912	42,116	88,969	297	299

○ 特別展期間中の入館者数

特別展名	期間	小中生	高大生	一般	計
濃飛の先史時代	54.4.27~54.5.27	8,272人	2,166人	9,641人	20,079人
世界の貝	54.7.21~54.8.31	4,196	459	6,267	10,922
濃飛の文人	54.10.12~54.11.14	11,899	1,289	4,740	17,928
合計		24,367	3,914	20,648	48,929

Ⅲ 事 業 概 要

1. 常 設 展

(1) 刀剣コーナー (昭和51年度～昭和54年度の展示資料一覧)

	昭和51年度	昭和52年度	昭和53年度	昭和54年度
第一期 (五～七月)	太刀 銘三条 鉾 無銘 太刀 銘国光 太刀 銘備前国長船住近景 太刀 銘兼氏 刀 銘越前康継 刀 銘兼元 刀 銘和泉守兼定 大永六年正月吉日 刀 銘兼常 刀 銘兼房 刀 銘奉籠春日大明神 美濃岡備中守 藤原清宣 万治三年庚子月吉日 刀 銘兼吉	刀 金象嵌銘正宗 刀 無銘伝西運 刀 無銘伝長光 刀 無銘兼光 太刀 銘兼氏 刀 銘兼定 刀 銘兼元 刀 銘兼泰 (兼松) 短刀 銘兼氏作 薙刀 銘家久	刀 折返銘備前国住雲(生) 刀 無銘伝兼光 刀 銘備州長船祐定 刀 銘兼元 短刀 銘濃州関住兼氏作 天文二十四年七月 短刀 銘兼房 短刀 銘相模守藤原政常 太刀 銘於手住太々土壇弘 切手山田五三郎 応需園山宗次作之 天保十三年二月日	太刀 銘長門 刀 銘濃州住兼元 槍 銘兼元 折返銘新藤五国光 刀 銘備前国長船十郎左 衛門尉春光 脇指 銘美濃守政常 槍 銘相模守藤原政常入道 刀 銘濃州住兼光
第二期 (八～一〇月)	太刀 銘康光 太刀 無銘伝兼光 短刀 銘信国 太刀 銘貞綱 刀 無銘伝志津 刀 無銘伝志津 刀 銘兼氏 刀 銘濃州関住兼常 文禄五年十二月 吉日 刀 銘飛騨守氏房 刀 銘丹波守藤原照門	刀 銘肥前国住人忠吉作 脇指 無銘伝志津 脇指 銘業田口近江守忠綱 太刀 銘正国 刀 銘長勝 刀 無銘大道 刀 銘濃州住寿命 刀 銘香定藤原兼次 刀 銘豊後守金高	太刀 銘直政用之(金銘)友成 太刀 銘備前国長船住右近 将保弘造 徳治二年十月日 太刀 銘備前国長船住十郎 左衛門尉春光 天正二十年八月吉日 刀 無銘伝金重 脇指 銘兼房 短刀 銘相模守政常入道 刀 銘永貞 元治元年三月吉辰 短刀 銘美濃国御勝山麓住 藤原永貞 文久二年八月日	太刀 銘行平 刀 無銘伝志津 刀 無銘伝直江志津 刀 金象嵌銘江 刀 無銘伝為兼 刀 銘出雲守吉武 刀 銘筑前住源信国吉政 脇指 銘陸奥守大道 天正十八年二月日
第三期 (一～三月)	太刀 無銘(寺伝小鳥丸) 太刀 銘貞則 太刀 銘助真 太刀 銘景依 刀 無銘直江志津 刀 銘濃州関住兼村 刀 銘兼元 短刀 銘兼友 短刀 銘兼房 刀 銘濃州関相模守兼安 寛文十一年吉祥日	刀 無銘伝志津 刀 無銘伝直江志津 刀 無銘伝村正 刀 銘濃州関住兼成作 天文七年八月日 脇指 銘相模守藤原泰幸 太刀 銘兼吉 刀 銘長広 短刀 銘兼房 脇指 銘兼助	太刀 銘長光 刀 無銘伝包永 太刀 銘兼氏(金象嵌) 松平利隆用之 刀 銘兼基 短刀 銘和泉守兼定 槍 銘美濃大井田同實 脇指 銘備前国水田住同重作 太刀 銘君万歳 備前国長船住藤山祐包 嘉永四年二月友成 五十八代孫	刀 無銘伝延寿 脇指 銘備州長船盛光 太刀 銘一肥前国出羽守行忠 短刀 銘兼貞 短刀 銘兼元 脇指 銘備中守藤原清宣 於美濃関作 短刀 銘兼満 槍 銘美濃守藤原政常
第四期 (三～四月)	太刀 銘嗣宗 刀 無銘伝盛景 太刀 銘吉則 脇指 銘兼景 刀 銘兼長 刀 銘兼常 太刀 銘兼友 短刀 銘兼鶴 脇指 銘香定藤原兼門 頼正武藤宗三良嘉門	太刀 銘備州長船盛光 応永二十二年八月日 刀 銘盛久 刀 銘伊勢守同輝 太刀 銘同次(良同次) 刀 銘兼光 刀 銘兼元 短刀 銘兼卷作 刀 銘陸奥守大道作 脇指 銘備前守藤原氏房 刀 銘近江守藤原清宣	刀 銘慶長十八年正月日 肥前国忠吉 理忠明寿五十六才 (花押) 刀 銘氏房入道作 刀 銘兼元 刀 銘備前国住長船源兵 衛尉祐定作之 天正四年八月吉日 刀 銘肥前国住近江大掾 藤原忠(廣) 脇指 銘兼成 天文二年八月吉日 太刀 銘延正(信正同入) 脇指 銘薩陽土奥次右衛門 元安 伊藤傳右衛門藤原 祐尚應景 文化五戊辰年八月 吉日作之	刀 無銘伝来国長 太刀 銘備州長船康光 短刀 銘村正 短刀 銘藤原正真作 短刀 銘正重 長巻 銘濃州関住兼長 刀 銘兼定 槍 銘濃州御勝山麓松井 次一良藤原永貞 萬延元年二月吉日 於津藩金森宗利造之

(2) 視覚障害者コーナー

① 経緯

博物館はまず目をとおして学ぶ教育機関であるところから、目の不自由な人には不向きと考えられてきた。昭和52年に岐阜県立盲学校の生徒が見学を訪れた際、付き添いの先生方が展示の雰囲気を通して少しでも伝えようと一生懸命説明していた。この様子を見てデスマスチルス全身骨格標本に触れてもよいという特別の便宜を図ったところ、生徒の喜びようは大変なものであった。この経験から視覚障害者にも直接に手に触れて、その触感で資料を理解できるような学習の場をどうしても確保したいとその方策を探ってきた。こうしたおりに、日本博物館協会が国庫補助を得て視覚障害者のために複製資料を製作することを企画し、全国に向けそれを具体化する博物館を募ったので、当館は逸早く名乗りをあげたのである。

② 触察資料

日本博物館協会が中心となって企画した資料は12点、国学院大学名誉教授樋口清之博士の監修をうけ、同大学にある石器・土器を実物に合わせて樹脂で成型し、彩色して仕上げた。製作にあたっては数回の検討会を重ね、質感を高めることに留意した。一方当館では先に特別展「濃飛の先史時代—縄文土器と石器の神秘—」を開催したおりに、縄文土器の製作工程を示すため、四日市市在住の武馬正敏氏から御協力を得たことがあった。武馬氏は縄文土器の製作方法を長年研究した結果その再現に成功したのである。その武馬氏に「視覚障害者コーナー」の趣旨を説明したところ、それに賛同し、実物と法量、文様が寸分わからない複製縄文土器18点を寄贈された。これらの資料に当館で複製したものを加え、縄文・弥生・古墳時代等の遺物の複製が触察資料として用意された。

③ 「視覚障害者コーナー」の開設

昭和54年11月29日、岐阜県立盲学校生徒や岐阜県盲人協会関支部会員ら関係者約50人が出席して「視覚障害者コーナー」の開設式が行われた。これは全国でも初めての試みで、博物館としては画期的なことである。展示資料は30点余り(右記)1点ごとに点字の解説を付け、弱視者には大きな

解説板もある。視覚障害者の利用申し出に対してはコンパニオンが付き添って指導する。昭和55年度には触察資料の移動展を高山市で開催することが計画されているが、今後は新しい活用のしかたと資料の充実を目指していきたい。

展示資料一覧

名 称	出 土 地	都道府県	時 代	備 考
細隆起線文丸底深鉢	石小屋洞穴遺跡	長野県	縄文草創期	日博協 斡旋
阿玉台式土器	阿玉台遺跡	東京都	〃中期	〃
台付浅鉢	余山貝塚遺跡	千葉県	〃晩期	〃
打製石斧	不明	〃	〃	〃
裝飾付壺	平沢遺跡	神奈川県	弥生中期	(2点) 〃
高坏	鉢田遺跡	福岡県	〃後期	〃
武装男子埴輪	児玉那兒玉町地内出土	埼玉県	古墳中期	〃
埴輪馬	行田市古墳公園地内出土	〃	〃	〃
家形埴輪	吾妻郡吾妻町小泉地内出土	群馬県	〃	〃
碗(はそう)	羽島郡柳津町出土	岐阜県	〃後期	〃
こしき	不明	〃	〃	武馬氏 寄贈
鷹鳥式小鉢	諏訪市千鹿頭社出土	長野県	縄文中期	〃
遮光器形土偶	恵比須田囀出土	宮城県	縄文前期	(3点) 〃
より糸文鉢	林遺跡	岐阜県	〃	〃
半截竹管文深鉢	二つ木貝塚	千葉県	〃	〃
釣手式土器	加茂郡八百津町	岐阜県	〃中期	〃
把手付深鉢	荒神山遺跡	長野県	〃	〃
隆起線深鉢	馬高遺跡	新潟県	〃	〃
火炎形深鉢	沖の原遺跡	〃	〃	〃
香炉形土器	札沢遺跡	長野県	〃	〃
双環把手付深鉢	長塚出土	〃	〃	〃
曾畑式深鉢	林遺跡	岐阜県	〃	〃
徳利形壺	平貝塚遺跡	青森県	〃晩期	〃
渦巻文鉢	東宮貝塚遺跡	宮城県	〃中期	〃
香炉形土器	上市川出土	青森県	〃後期	〃
朱塗鉢型土器	恵日山遺跡	岐阜県	〃前期	〃
櫛描文壺	下の山遺跡	鳥取県	弥生後期	〃
〃	富田方遺跡	愛知県	〃	〃
貝殻文台付壺	登呂遺跡	静岡県	〃	〃
礫器	加茂郡八百津町	岐阜県	先土器	〃
石皿・すり石	高山市泉水	〃	縄文中期	〃
打製石斧	加茂郡白川町	〃	〃	〃
土師器壺	四郷遺跡	〃	弥生後期	〃
大深鉢	東京都秋川市	東京都	縄文中期	〃

2. 特別展

(1) 濃飛の先史時代——

縄文土器と石器の神秘

4月27日～5月27日

縄文時代は、約1万年前に始ったといわれている。それからおよそ8千年間、縄文人は自然の中で、狩猟や採集を中心とする採集経済を基に同一文化相の社会を続けていた。この時代は、土器の変化を手がかりとして、6時期に分けることができる。

岐阜県下濃飛の縄文遺跡は、200余か所を数えることができる。湖や川筋に沿った台地や丘陵地の各遺跡から出土する土器を眺めると、土器文様ももっとも発達した縄文時代中・後期には、長野県を経て木曾川沿いに下ってきた関東南部系の文化と、宮川・川上川・大八賀川・小島川沿いに広がり、飛騨川沿い文化と合流した北陸系の文化とが、美濃加茂・各務原等の台地の文化に影響を与えていることがわかる。一方関西系の土器文化は、損斐川や長良川流域にひろがり、それ以前に



伝えられた文化と合流し、ひろがっている。そして、これら東西の縄文中・後期の文化の融合された美濃平野一帯は、土器の芸術といわれる勝坂式から加曾利E式と呼ばれる土器表現の華が開いた。それは、回転縄文から指やへら先が自由に文様を描き、つくる人のもつ美的な感覚を十分に発揮してつくりあげられたものである。

今回の特別展の第1の意義は、県下で出土した代表的な修復土器65点、タイプ土器片80点を展示

して、中期土器を中心に草創期から晩期までの土器の変化を追跡したことである。更にその中で、全国的に数少ない中部山岳地域の特色を示す釣手式土器12点を集めたことである。

次に長野が土器文化圏の頂点とすれば、濃飛は石器文化圏といえることができる。その石器群約500余点を展示できたことも大きな意義がある。従来石器は、展示に映えないところから、多くの紹介がなされなかったが、石器具を生活用具・装飾用具・信仰用具の用途別且つ系統的に展示を試みた。すなわち、草創・早・前期の石器を代表する尖頭器・搔器・石槍・石匙・石鏃をはじめとし、中期以降は石鏃の変化と打製石斧の地域的な形態の変化、乳棒状石斧と石皿・石棒・凹石等を展示して、土器を含めこれらより類推できる農耕の存在の問題を提示した。

また、後・晩期に、中部山岳地域を中心に発達した御物石器や石冠・石棒とか、この他石刀・石剣・独鈷石・多頭石斧など石造物や、非実用性の強い定角式石斧や有孔石斧、装飾具の勾玉や扶状耳飾などの展示は、縄文人の呪術性を考えるための主要な遺物を紹介したことになる。特に御物石器16点が出品されたことも異形石器研究の上でも大きな意義があったと考える。

今回の展示では、全国的に数少ない後期の丸木舟や、自然生活を反映した縄文人の頭骨3点及び食用の獣骨片、山地に発見される貝輪、牧野小山遺跡から出土した全資料の公開、このほか実験考古による復原土器の展示など、展示の手法にも県内外の観覧者に大きな反響を与えた。

また、会場の雰囲気高めるものとして、ベルギー国際音楽コンテストに、「縄文譜」を作曲しグランプリ賞を受けた藤掛広幸氏に、シンセサイザーによるBGMを作曲していただき、縄文鑑賞会を開いたことも特筆される。

期間中の来館は2万人を数え、小中学生の関心は特に高かった。県内外の郷土史家の来館も多かった。

このことよりはるかな私たち祖先の生活や心をさぐり求めた今回の特別展によって、埋蔵文化財に対する理解を深め、その愛護の輪を広げていくことに寄与できたと考える。

出 品 目 録

番号	出品物名称	点数	市町村	遺跡名	番号	出品物名称	点数	市町村	遺跡名	番号	出品物名称	点数	市町村	遺跡名	
1	縄文土器(表裏面文片)	10	坂下町	花の湖遺跡	73	磨製石斧	4	"	"	145	"	1	莊川村	莊川神社遺跡	
2	"(押型文片)	10	"	水坂	74	砥石	5	"	"	146	"	1	小坂町	湯屋	
3	"(尖底)	1	小坂町	水口	75	凹石	3	"	"	147	"	1	白鳥町	前田	
4	"(押型文片)	10	朝日村	中道	76	石楯	1	洞戸村	市場岩野出土	148	"	1	神坂町	中切なかり	
5	"(")	10	小坂町	橋場	77	"	1	小坂町	岩井田遺跡	149	石	刀	1	美山町	柿野乙原出土
6	"(台付鉢型)	1	福岡町	夏焼岩陰	78	"	1	八百瀬町	林	150	環状石斧	1	丹生川村	下保	
7	"(鉢)	1	下呂町	峰一合	79	"	1	白鳥町	石徹白番屋出土	151	"	1	朝日村	青屋	
8	"(深鉢)	1	"	"	80	石	20	高山市	漆垣内	152	"	1	八幡町	東乙原	
9	"(鉢)	1	中野市	寺上	81	石	20	清見村	牧ヶ洞出土	153	"	1	恵那市	竹並乙原遺跡	
10	"(深鉢)	1	"	大日向	82	"	20	高山市	内垣内	154	"	1	小坂町	深作	
11	"(尖底片)	1	洞戸村	飛瀬中村出土	83	石	20	小坂町	岩井田遺跡	155	六頭石斧	1	朝日村	青屋出土	
12	"(深鉢)	1	久々野町	堂の上遺跡	84	"	1	白鳥町	石徹白番屋出土	156	四頭石斧(複製)	1	福岡町	下島遺跡	
13	"(")	1	可児町	北裏	85	打製石斧	10	上宝村	石徹白番屋出土	157	独鉢石	1	園府町	幅	
14	"(")	1	園府町	荒城神社	86	"	10	清見村	江黒遺跡ほか	158	"	1	古川町	高野	
15	"(櫛形深鉢)	1	河合村	舟原	87	"	10	白鳥町	前田	159	"	1	朝日村	青屋	
16	"(深鉢)	5	清見村	門端	88	"	10	白川町	白川町各地	160	"	1	宮村	日影	
17	"(鈎付深鉢)	1	可児町	北裏	89	"	10	恵那市	恵那市各地	161	"	1	可児町	北裏遺跡	
18	"(深鉢)	3	各務原市	炬畑	90	"	10	坂下町	坂下町各地	162	"	1	白鳥町	前田	
19	"(")	2	金山町	乙原	91	"	10	各務原市	炬畑遺跡	163	"	1	武儀町	岩井戸	
20	"(")	1	"	卯野新田	92	磨製石斧	20	白鳥町	前田	164	"	1	白鳥町	越佐	
21	"(把手付深鉢)	1	"	岩瀬八坂	93	"	20	"	飛瀬各地出土	165	御物石器	1	"	前田	
22	"(深鉢)	1	"	牧野小山	94	"	2	洞戸村	市場岩野出土	166	"	2	神岡町	石神	
23	"(")	1	中野市	上地	95	石	10	小坂町	南垣内遺跡	167	"	4	大和村	母袋出土	
24	"(")	1	久々野町	渚	96	"	10	可児町	北裏	168	"	1	朝日村	青屋	
25	"(")	1	上宝村	本郷	97	石の釣針	2	各務原市	炬畑	169	"	1	古川町	福蔵	
26	"(鉢)	2	"	"	98	"	1	八百瀬町	逆巻	170	"	1	恵那市	森蔵遺跡	
27	"(深鉢)	1	高山市	山口上野	99	"	1	小坂町	湯屋	171	"	1	神岡町	控置白山神社	
28	"(")	1	小坂町	水口	100	石	50	各務原市	炬畑	173	"	1	益田郡	江黒出土	
29	"(")	1	付知町	谷端	101	石	2	白鳥町	前田	174	"	1	大和村	落部	
30	"(")	1	関市	松原	102	石	2	白鳥町	吉井町出土	175	石	1	"	下栗巣	
31	"(釣手)	1	八百瀬町	出土	103	身体裝飾品(大珠)	2	美濃加茂市	吉井町出土	175	"	1	"	長瀬古子	
32	"(")	2	清見村	門端遺跡	104	"(有孔石器)	2	清見村	門端遺跡	176	"	1	小坂町	和神遺跡	
33	"(")	1	上宝村	本郷	105	"(")	2	板取村	太郎兵衛	177	"	1	莊川村	和神遺跡	
34	"(")	2	古川町	堂の上	106	"(")	4	古川町	下野出土	178	"	1	古川町	福蔵出土	
35	"(")	1	付知町	谷端	107	"(")	2	白鳥町	前田遺跡	179	"	1	"	高野五社	
36	"(")	1	高山市	山口上野	108	"(")	4	"	石徹白番屋出土	180	"	1	上宝村	本郷	
37	"(")	1	丹生川村	桐山	109	"(勾玉)	1	"	"	181	"	1	高山市	垣内	
38	"(")	1	"	がうどの	110	"(")	1	小坂町	南垣内遺跡	182	"	1	丹生川村	島	
39	"(")	1	"	"	111	"(")	2	美濃加茂市	美濃加茂市内	183	"	1	"	北方	
40	"(")	1	小坂町	南垣内	112	"(玉)	2	白鳥町	前田遺跡	184	"	1	丹生川村	広敷出土	
41	縄文土器(鉢)	1	小坂町	南垣内遺跡	113	"(")	1	小坂町	水口	185	"	1	黒瀬村	黒石	
42	"(片)	1	"	"	114	"(")	1	"	南垣内	186	"	1	萩原町	上呂	
43	"(台付鉢型片)	1	"	"	115	"(扶杖耳飾)	4	八百瀬町	大鳥	187	"	1	大和村	母袋	
44	"(鉢)	1	白川町	中ノ森	116	"(")	3	"	不老井	188	"	1	河合村	壺土神社	
45	"(注口)	1	園府町	宮垣内	117	"(")	1	園府町	村山	189	"	1	"	小無瀬遺跡	
46	"(")	1	久々野町	小屋名	118	"(")	2	美濃加茂市	今渡出土	190	"	1	中野市	小森屋ノ木	
47	"(鉢)	1	小坂町	阿弥陀堂	119	"(耳飾)	1	板取村	太郎兵衛遺跡	191	"	2	白鳥町	前田	
48	"(片)	4	"	"	120	"(")	1	小坂町	水口	192	"	2	高山市	赤保木出土	
49	"(深鉢)	2	可児町	北裏	121	"(")	3	各務原市	炬畑	193	"	偶	1	丹生川村	町方
50	"(薬棺)	3	各務原市	炬畑	122	"(")	3	可児町	北裏	194	"	2	可児町	北裏遺跡	
51	自然遺物(炭化物)	1括	下呂町	峰一合	123	身体裝飾品(具輪)	5	丹生川村	根方岩陰採集	195	"	1	上宝村	黒垣内出土	
52	"(")	"	各務原市	炬畑	124	織物の圧痕のある土器(片)	15	小坂町	小坂町各地	196	"	1	八百瀬町	逆巻	
53	"(")	"	久々野町	堂の上	125	石	2	久々野町	堂の上遺跡	197	"	2	高山市	赤保木	
54	"(骨角)	"	美濃市	港町岩陰	126	"	2	八百瀬町	立壁	198	"	2	清見村	門端遺跡	
55	"(")	"	板取村	太郎兵衛	127	"	2	白鳥町	前田	199	"	3	丹生川村	丹生川村各地	
56	"(")	"	丹生川村	根方岩陰採集	128	"	1	河合村	中田水添	200	"	1	上宝村	本郷出土	
57	"(貝)	"	小坂町	小坂町出土	129	"	1	丹生川村	上野出土	201	土	1	丹生川村	北方	
58	丸木舟	1	谷汲村	末福遺跡	130	"	1	久々野町	大西	202	石	偶	1	丹生川村	丹生川出土
59	石	皿	白鳥町	大鳥	131	"	2	八幡町	千虎	203	"	1	清見村	門端遺跡	
60	"	"	"	前田	132	"	1	"	乙原	204	線刻石	1	"	"	
61	"	"	八幡町	門原出土	133	"	1	白鳥町	前田遺跡	205	"	2	丹生川村	上野平出土	
62	"	"	久々野町	堂の上遺跡	134	"	1	莊川村	莊川村神社	206	"	1	八幡町	西乙原	
63	"	"	莊川村	莊川神社	135	"	1	洞戸村	通元寺出土	207	異形石器	1	河合村	壺土神社	
64	"	"	白鳥町	石徹白番屋	136	"	1	古川町	五社高野	208	"	1	清見村	牧ヶ洞	
65	"	"	丹生川村	上野出土	137	"	1	園府町	角川	209	"	1	白鳥町	前田遺跡	
66	"	"	"	"	138	"	1	"	金桶	210	凹石	5	"	"	
67	"	"	久々野町	小屋名	139	"	1	丹生川村	広敷	211	牧野小山遺跡出土資料	1括	美濃加茂市	牧野小山遺跡	
68	削器	5	坂下町	花の湖遺跡	140	石	1	上宝村	吉野	212	森下遺跡採集資料	1括	高山市	森下遺跡	
69	器	5	"	"	141	"	1	古川町	信包	213	"	1	岡山県	彦崎貝塚	
70	影石	5	"	"	142	"	1	"	高野五社	214	"	1	愛知県	伊川津	
71	器	20	"	"	143	"	1	"	丹生川	215	出土伝世品	1	福島県	三貫地	
72	尖頭器	6	"	"	144	"	1	高山市	垣内	"	"	1	"	"	

(2) 世界の貝 —その美と造形—

7月21日～8月31日

四方を海で囲まれた日本は、昔から貝に接する機会も多く、食用や装身具などとして利用され、貝は人々に親しまれてきた動物である。

貝は、動物の世界で昆虫について種類が多く、地球上に約112,000種が生息するといわれ、なかでも、日本の近海や陸地には約6,000種が知られ、日本は、世界でも有数の貝の採れる国である。

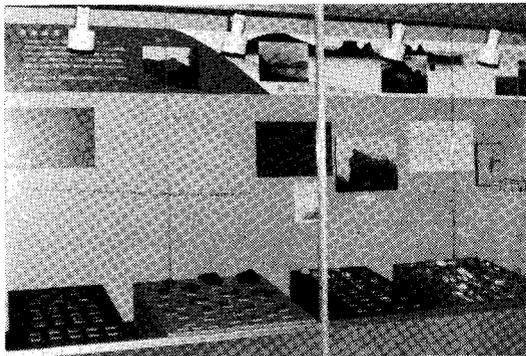
当県においては、海に接する県に比べ、貝に触れる機会は、子どものころから少ないといえる。

この特別展では、宮内庁から天皇陛下御採集の標本の特別出品もいただき、身近な貝をはじめ、広く世界に生息する貝を展示した。

なお、この機会に、貝の生活や分布、貝と人とのふれあいなどの理解を深め、貝に対する興味と関心の高揚、ひいては、自然がかもしだす神秘にも接することができるよう意図して企画した。

ここで、展示の主な内容を記載することにする。

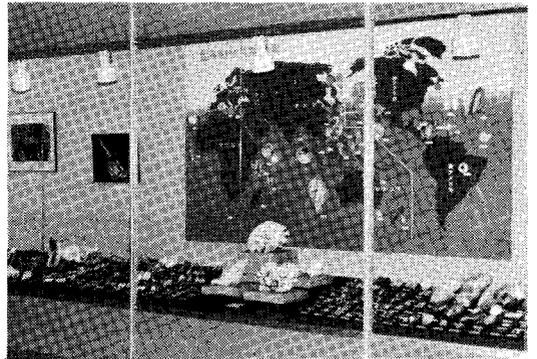
特別出品 天皇陛下御採集標本



陛下がおんみずから御発見になった新種、サガミナガシなど3点をはじめ、オオイトカケガイ、リンボウガイなど貝を代表する標本の御出品を賜わった。

日本の貝

陸に住む貝や、淡水に住む貝をはじめ、海水浴や潮干狩でよく見かける岩磯や砂浜に住む貝・日本近海の浅い海や深い海に住む貝を展示し、身近な貝を通して、貝が生息する環境と貝の外形や色、種類などを理解できるよう工夫し、このコーナーで貝標本 895点を出品した。



世界の貝

日本より北の海に住む貝と南の海に住む貝に大別し、世界に生息する貝を1,489点紹介した。

北と南では、色彩、光沢、殻の厚さ、大きさ、それに種類の数などに違いがあることを把握できるよう展示した。

日本を代表する貝

生きている化石ともいわれる珍しいオキナエビス、ペニオキナエビス、コシダカオキナエビス、テラマチオキナエビス、リュウグウオキナエビスをはじめ、形が整って色も美しく、産出が稀なことなどで貴重な貝といわれている日本の三名宝、それにオオイトカケ、リンボウガイ、ヒオウギ、ニシキヒタチオビ、チマキボラなど、日本近海で生息する代表的な貝を一角に集め紹介した。

珍しい貝

コケミミズガイ、カブラガイ、ツバメガイ、クマサカガイ、ガンゼキバショウなど形のか変わった貝をはじめ、毒牙を持ったアンボイナやタガヤサンミナシ、美しい色彩やがら模様のあるナンヨウダカラ、ウミノサカエイモガイ、世界の三名宝のシンセイダカラなど併せて 243点を展示した。

貝のなかまとからだ

実物標本をもとに貝のなかまの分類を紹介するとともに、貝のからだのつくりを図解や標本をもとに理解できるようにした。

なお、二枚貝や巻貝の外形による大別についても標本展示により紹介した。

世界のカタツムリ

岐阜県は、山や川が多く地形が複雑であって、さまざまな環境のところがあ、それに、石灰土

質が豊富で陸貝の生育に恵まれている。

現在では、県内で 117種が確かめられているが、ここでは、世界各地のカタツムリ 220点を展示し、生息場所によって大きさや色彩に違いのあることなどの理解ができるようにした。

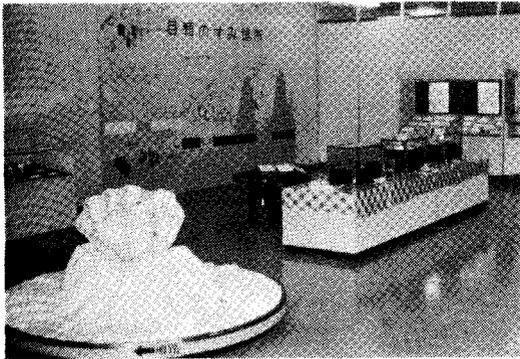
その他の内容

世界地図の大パネルの上に各地域の代表的な貝を取り付けての分布の表示。岐阜県内産の特異な貝とその分布。貝の住み場所とそこに住む貝のからだの構造。県内産を主にした、ありふれた貝の化石。

また、市場で見られる貝、貝と寄生虫、貝をデザインした世界各国の切手の紹介など、人の生活にかかわりのある内容。

更には、貝の生態を見ていただくため、淡水産及び海水産の生きた貝の展示も含めて構成し展示した。

この特別展では、世界各地に生育する貝の標本、1,255種、3,367点。その他パネルなど109種、370点を展示し、会期中に約 11,000人の観覧者を数える盛況であった。



なお、この特別展を開くにあたって宮内庁からは天皇陛下御採集の標本を御貸し下げいただいたのはじめ、村上貝類研究所、国立科学博物館、その他、多くの方々より多大の御尽力を賜わった

出品内容

(特別出品の貝)

サガミナガニシ、ハヤマヒラコマガイ、ミタマキガイなど、相模湾産 7種。テンシノツバサガイ(フロリダ)など 3種。貝類図鑑 2点。

(日本の貝)

日本の南西沿岸産の貝を7つのコーナーに分けて展示。

陸に住む貝のツクシマイマイ(福岡県大鳴山)ナミマイマイ(福井県小浜)など27種 120点。淡水に住む貝のトガリササノハ(岡山県倉敷)など29種 80点。磯の貝 25種、100点。砂浜の貝 32種 97点。浅い海の貝のベンケイガイ(和歌山県)、マベガイ、マクラフデ(沖縄県)、モスソガイ(伊豆大島)など 135種 334点。深い海の貝 74種 164点。日本の代表的な貝13種 25点。

(北の海の貝)

ホタテガイ(北海道)、ミギマキタテゴトナシボラ(ベーリング海)など48種 113点。

(南の海の貝)

アカネアワビ(カリフォルニア)、ムラサキムカデガイ(モーリシアス)、オオゾウガイ(フィリピン) サラサマクラ(ポリネシア)、シノノメイモ(オーストラリア)など488種 1,376点。

(珍しい貝)

アラフラオオニシ(アラフラ海)、ミミズガイ(フィリピン)、ベンガルイモ(ベンガル湾)、サラ



サダカラ(アフリカ西部)など160種 243点。

(浮遊する貝)

マサコカメガイ(静岡)、マルカメガイ(高知) カメガイ(鹿児島)など12種 58点。

(世界のカタツムリ)

スミレマイマイ(フィリピン)、チチカケマイマイ(ニューギニア島)など81種 220点。

その他、岐阜県内の珍しい陸貝など 425点。それに貝の化石、切手など109種 370点。

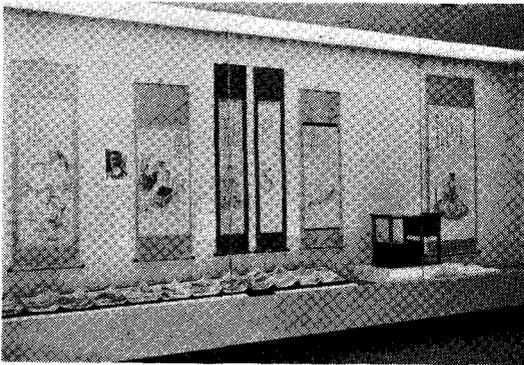
(3) 濃飛の文人 10月12日～11月14日

美濃・飛騨両国の文教は、文化・文政期より幕末に至る間、その最盛期を迎え漢学詩文・国学・和歌・俳諧等の諸分野に多くのすぐれた文人を輩出した。

本展はこうした濃飛文教史上一段と光彩を放った時期の文人に焦点をあて、そのすぐれた書・画及び遺品を展覧し、郷土文化の特性と併せてその文化の粋を紹介することを意図した。

美濃が古くから東西交通の西路として位置し、東西文化の動向と深くかかわり、その影響をより多く受けてきたのに対し、飛騨は四方を山に囲まれ、おのずから文教の性格を異にしていた。本展ではこうした濃飛文教の相違を踏まえ、全体的立場からその地域性・系統性を考慮しつつ、14人の文人を取りあげた。

まず美濃の文教のうち、大垣を中心とした西濃及び、美濃を中心として中濃に広がる文壇においては、漢詩文が最も風靡し、「詩壇の梟雄」といわれ、かつ日本の李白とも称された漢詩人梁川星巖をはじめ、頼山陽に師事し、その影響を受けた



多くのすぐれた文人たちが輩出した。したがって本展では、特に頼山陽を加え、西濃では梁川星巖・その妻紅蘭・関秀詩人として名高い江馬細香・大垣藩の家老で詩社「咬菜社」を組織した小原鉄心・詩人で南画家の高橋杏村・医家でありかつ詩文にも長じた神田柳溪・中濃では山陽門下の高弟村瀬藤城をはじめとして、その弟でありかつ南画界に重きをなした村瀬秋水、更には村瀬一族であり藤城門下四天王の一人でもある村瀬太乙を取りあげた。こうした人々は互いに交友し詩才の研鑽

につとめ、特に美濃大垣では、梁川星巖等を中心として「白鷗社」を結成して集い、美濃文教の一大盛期を築いたのである。

また東濃からは、岩村藩から出て幕府の儒官となり、我が国儒学史上屈指の学者となった佐藤一斎を取りあげた。

一方飛騨では国学を中心とし、本居宣長の門下で国学の振興普及に大きな力を占めた田中大秀をはじめとして、飛騨最初の学問所「静修館」を開いた赤田臥牛、大秀門下四天王の一人富田礼彦を取りあげた。

本展は、これら文人の遺墨40点、画26点、遺稿22点、遺品25点の計 113点の資料より構成した。展示資料のうち、「白鷗社集会図」・藤本鉄石画「梁川星巖肖像」・椿枕山画「佐藤一斎肖像」・雲嶺画「富田礼彦肖像」等肖像資料は可能な限り展示し、人物理解の一助とした。また遺墨・画に関しては、できるかぎり郷土とのかかわりの深いもの、及び、その文人の真髓をうかがうにふさわしい作品を取りあげた。例えば頼山陽に関しては美濃来遊の折につくられたものを、梁川星巖についてはより広く膾炙され、かつ星巖の勤王の志をうかがうことができる吉野懐古を、また最も梅を好んだ小原鉄心においては、その代表的遺墨「問我梅花妙」等である。本展において、従来なお十分な評価を受けるまでに至っていない神田柳溪について積極的に取り組み、詩稿「南宮詩抄」をはじめその大作「岐俎雜詩六曲一雙屏風」等を通して、そのすぐれた詩才を紹介することができたことは、本展の大きな意義であった。またその準備調査段階において、県下各地に散在現存するこれら文人に関するすぐれた資料約 250 点に関し、所在確認及び詳細な記録の作成を実施することができ、今後この分野の研究を一層発展させる上で貴重な成果をおさめた。

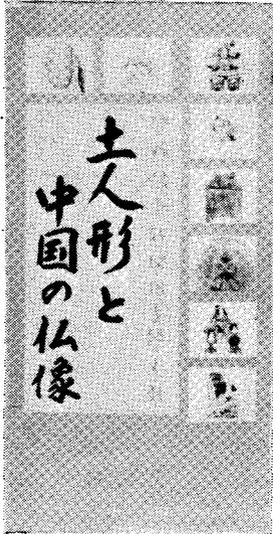
このように本展が、多くの成果をおさめることができたのは、富長蝶如・浅野忍・市原三三・神樹弘・大野政雄の諸先生方の全面的協力によるところが大きい。とりわけ富長蝶如先生には、本展全体の監修者として、貴重な示唆と多大な協力を賜わった。ここに改めて深く感謝する次第である。

出 品 目 録

No.	資 料 名	形状	寸 W × H	法	No.	資 料 名	形状	寸 W × H	法
1	紙本山陽書閣原詩	軸装	28 × 128.5		57	紙本淡彩正隆画大秀賛武藏野・富士山図 (対幅)	軸装	59.5 × 135	
2	" 訪蘭斎翁	"	29 × 127		58	紙本大秀書桜長歌	"	26.5 × 86.5	
3	" 与萬年	"	54 × 136		59	絹本水墨大秀画賛三本松図	"	28 × 96	
4	絹本着色白鷗社集会図	"	36 × 111		60	絹本着色周溪画大秀賛衣通姫図	"	36 × 99	
5	絹本着色梁川星巖肖像藤本鐵石画	"	30 × 95		61	" 寿豊画大秀賛須磨浦図	"	33 × 75	
6	" 星巖画賛雪棧図	"	42 × 126		62	紙本大秀筆むらきもの和歌	"	28 × 108.5	
7	絹本星巖書宋高宗賜秦檜壺尊歌并引	"	51 × 150.5		63	養老美泉辯旧碑文 (拓本)	"	29 × 107	
8	紙本星巖書七言絶句 (対幅)	"	29 × 129.4		64	養老美泉辯註 (3册)	版本		
9	紙本星巖・鉄兜・竹外書吉野懷古 (三幅対)	"	30.5 × 151		65	絹本着色富田禮彦肖像雲嶺画	軸装	35 × 99	
10	" 星巖書双鷺州各詩	"	27.3 × 126.5		66	紙本節齋書五十一齡自賀詩	"	55.5 × 122	
11	" 藍川舟中二首之一秋風吹破	"	30 × 138		67	〔梁川星巖〕書翰 (細香宛)	折本		
12	星巖遺愛瓢				68	硯 (1)			
13	絹本着色梁川紅蘭肖像勝龍画担風賛	軸装	36 × 117		69	筆 (1)			
14	" 水墨紅蘭画賛捐婁図	"	100 × 62.5		70	印 (8)			
15	" 着色紅蘭画賛群蝶図	"	41.5 × 113		71	〔梁川紅蘭〕印 (3)			
16	" 着色紅蘭画星巖賛秋叢蛙遊図	"	38 × 107		72	〔江馬細香〕書翰 (藤城宛)	軸装		
17	絹本水墨細香画賛雪中生菊図	"	37 × 128		73	硯 (2)			
18	紙本水墨細香画賛夏景山水図	"	41 × 130		74	墨壺 (1) 水滴 (1)			
19	絹本水墨細香画賛墨竹図	"	57 × 133		75	筆 (1)			
20	鉄心胸像 (中村暉作)	彫像			76	筆立 (1)			
21	紙本鉄心書為萬家醒春樓主人	軸装	158 × 105		77	筆置 (1)			
22	" 問我梅花妙	"	39.5 × 104		78	文鎮 (3)			
23	紙本水墨鉄心画賛墨梅図	"	47 × 136		79	印 (5)			
24	絹本着色杏村画蘇修禊図	"	50 × 138		80	印箱 (1)			
25	紙本着色杏村画冬・春山水図 (対幅)	"	51 × 127		81	湘夢遺稿上・下	版本		
26	絹本着色杏村画賛花鳥図	"	39 × 140		82	詞稿 (天保2年～3年 山陽添削)	草稿		
27	柳溪書岐岨雜詩六曲一双屏風	屏風			83	〔神田柳溪〕柳溪書不破古閑歌		123 × 19	
28	紙本柳溪書矢走渡作	軸装	44 × 134		84	南宮詩抄上・下 (南宮山房図杏村画)	版本		
29	絹本着色村瀨藤城・立斎・秋水三兄弟肖像	"	35.5 × 83		85	〔村瀨藤城〕藤城書梅莊百年樓記	巻物	116.5 × 27.5	
30	紙本藤城書甲辰元旦詩	"	55.5 × 130		86	" 日記			
31	" 但州鷹野浦詩	"	29.5 × 132		87	〔頼山陽〕書翰 (藤城宛)			
32	" 修堤行二首	"	47 × 130		88	〔村瀨藤城〕" (秋水宛 2)			
33	秋水画雪峽賛幽芬五集図風呂先屏風	屏風			89	藤城遺稿	版本		
34	絹本着色秋水画賛草廬三顧図	軸装	60 × 40		90	宋詩合璧統例言原稿	草稿		
35	" 秋水画仿牧溪図	"	54 × 33		91	二家対策	版本		
36	" 秋水画賛山水図	"	68 × 131		92	印 (8)			
37	" 秋水画西園集図	"	53.5 × 141		93	〔村瀨秋水〕書翰 (雪峽宛 2)			
38	" 秋水画賛松林山水図	"	45 × 107.5		94	己未秋日作草稿	草稿		
39	絹本水墨秋水画賛山水図	"	52 × 133		95	印 (2)			
40	秋水画天山台図長巻	巻物			96	〔村瀨太乙〕硯 (1)			
41	邱壑帖 (秋水画)	面帖			97	犬山藩学校教授任用書	軸装		
42	紙本水墨太乙画賛十六仙僧図	軸装	58 × 104		98	印 (2)			
43	" " 大黒・恵比寿図 (対幅)	"	30 × 137		99	眼鏡・ケース			
44	絹本水墨太乙画賛宝船図	"	50 × 116		100	扇子 (1)			
45	紙本着色佐藤一斎肖像 (祟重文)	"	61 × 182		101	煙管 (1)			
46	紙本一斎書水到渠成菓熟蒂落	"	62 × 183		102	如意楳1)			
47	" 萬寿無疆	"	52 × 116		103	〔佐藤一斎〕一斎書不破閑址立石記・版本	巻物	160 × 30	
48	" 心静延寿	"	27.5 × 119		104	言志晩録 (2)	版本		
49	茶棚 (雲煙過眼愛叟)	棚	83 × 14.5 × 39		105	愛日樓文詩 (4)	"		
50	絹本着色周溪画臥牛・章斎賛舞々舞図	軸装	34 × 96		106	〔赤田臥牛〕臥牛集初編 (5)	"		
51	" 龍田画臥牛賛山水図	"	58 × 129		107	〔田中大秀〕扇面酒瓢銘額	額装	69 × 41	
52	" 長嘯画雲樵賛瀧図	"	33.5 × 100		108	竹取翁物語解 (文政13年初版6)	版本		
53	紙本水墨章斎画臥牛賛梅図	"	26 × 67		109	" (天保2年再版6)	"		
54	八雲彩文台	文台	74 × 14.5 × 39		110	荏野樂志	"		
55	短冊 (文台歴代継承者 田中大秀, 山崎弘泰, 山崎弓雄, 吉島斐之, 富田豊彦, 浦水門)	短冊			111	〔富田禮彦〕咏草 (10)	草稿		
56	荏野文庫額	額装	108 × 38		112	白檜園詩抄初編	版本		
					113	運材図會	"		

3. 資料紹介

(1) 土人形と中国の仏像 12月17日～1月31日



これまで当館に寄贈を受けた人文関係資料は、およそ20,000点を数えることができる。そのいずれもが貴重なものであるが、いままでこれらの資料すべてを常設展示室で紹介することはできなかった

このため、今回寄贈を受けた数々の中から、民俗・美術・考古の三分野に優品を選び県民に紹介を行った。

民俗分野では、土の匂いのする懐しい郷土玩具・土人形60点を紹介した。その内訳は、瑞浪地方の産になるもの30点、長野県中野地方のもの12点、高山産が3点、多治見系の産10点、伏見博多系その他が5点で、いずれも昭和初期の製作になるものである。

このうち27点の土人形の背面には、人形を求め与えた親と子供の名が年月入りで書き入れてあり、千旦林の熊谷家の「ノリコ」・「ケイコ」・「トモエ」の三姉妹が、親の愛情にはぐくまれていた様子や、姉から妹に土ビナやヒナ壇の譲り渡しなどがあったことを知ることができた。また、病気・災難除け、招福開運の縁起を求める土人形の素材にも時代色を見ることができた。

美術分野では、中国から渡って来た仏像3点を紹介した。北魏様式の石造観音立像・唐様式の石造仏頭部と塑造彩色頭部である。戦前に名古屋の貿易商が求めたものを寄贈者が入手されたもので、石質は当館笠原学芸員の分析により、大陸産の石灰岩と同じものであることがわかった。3点ともデリケートな彫刻性がすみずみにまでみざり、美術的に貴重な資料である。

考古分野では、沖縄の墓制史・陶芸史上きわめて重要な資料である厨子甕^{じーしーかこみ}（壺型厨子甕2点・御殿型厨子甕1点）と、九州で出土したと思われる弥生時代後期の合口甕棺^{あわせぐら}1点、津市丸の内地内の電話敷設工事現場から発見されたS字口縁台付壺3点、壺1点ほか土器片25点、そして、関市の旧小金田小学校々庭より発見された蔵骨壺（10世紀）1点を展示した。

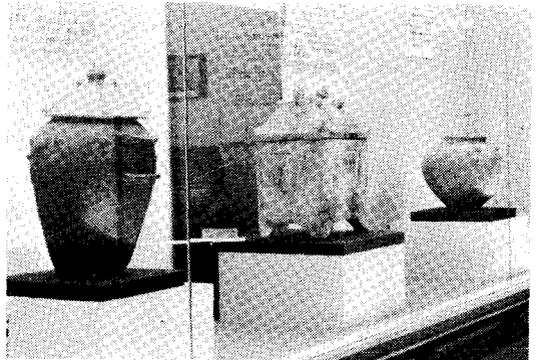
土人形の資料には、県内の土人形製作地の分布と歴史・作り方と素材などを文と作図、イラストによって解説した。

仏像は、宝慶寺石仏群の一つとも思われるので、その問題点を説明し、厨子甕については沖縄県立博物館上江洲均学芸員の研究報告書を参考として解説を加えた。

考古分野で注目されるのは、S字口縁台付甕である。この土器は弥生時代中器いわゆる山中期の東海地方に祖形が認められ、後期の元屋敷a類にうけつがれ形態がととのい、b類にいたって普遍的な特徴が規格されて東西に伝播した資料として貴重なものである。

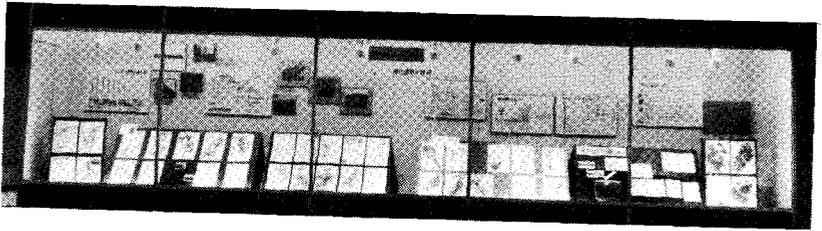
本資料紹介は、寄贈を受けた各位の御好意に報いるとともに、文化財についての見識を深めそれによって文化財愛護の思想の輪が大きく広がることを期待したものである。

なお資料の寄贈を賜った方は次のとおりである
○土人形一故熊沢辰二氏（白川町）、成木一彦氏（中津川市）
○仏像・厨子甕・合口甕棺一國井増太郎氏（岐阜市）
○弥生土器一服部勝次氏（名古屋市）
○蔵骨壺一藤村欣二氏（東京・大田区）

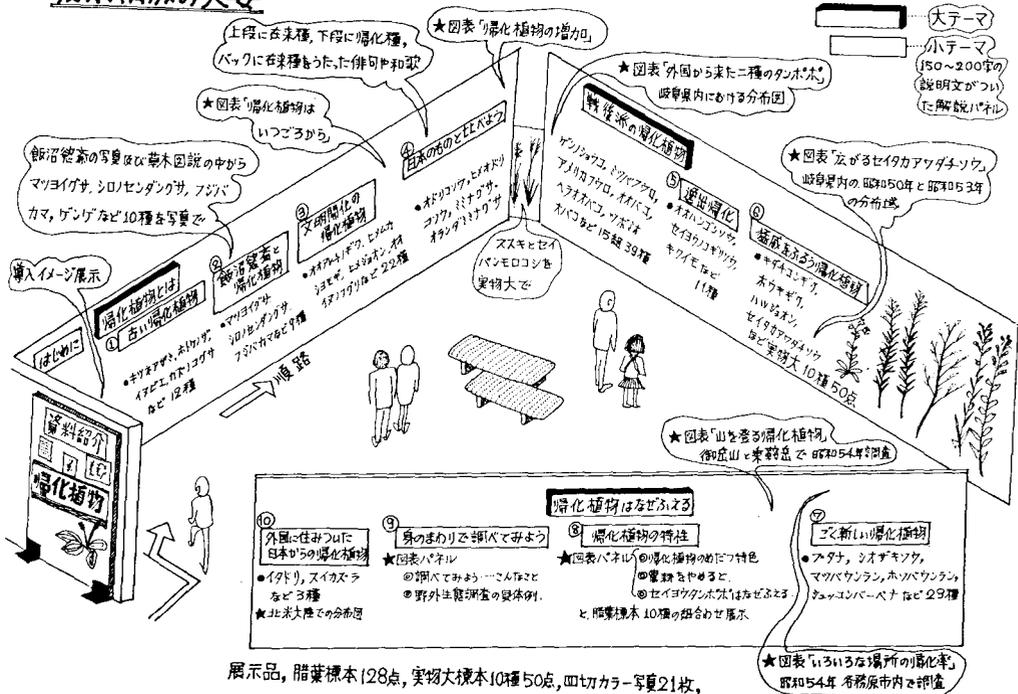


(2) 帰化植物 3月1日
~30日

博物館は、資料の収集
保存、展示と事業活動、
調査と研究の三本柱の有
機結合体の機関である。
この資料紹介は、昭和54
年度科学研究費補助金
(奨励研究B)〔文部省〕
を得て、当館の小野木学
芸員が行った県下の帰化
植物の実態調査と収集活
動にもとづく成果を公開
したもので、博物館の三
機能がうまくからみ合っ
た催し物となり、マスコ
ミ界も大々的に報道し、
好評であった。展示内容
の概略は、下図及び写真
のようで、全部学芸員の
手づくり展示であった。



展示構成の概要



展示品、腊葉標本128点、実物大標本10種50点、四切カラー写真21枚、

4. 資料調査収集活動

(1) 人文部門

	館		蔵		借 用	寄 託	計
	実 物	複 製	そ の 他	(寄贈物)			
考 古	474	65	7	(449)	315	337	1,198
歴 史	474	8	185	(474)	119	8	794
民 俗	1,088	0	2	(1,088)	0	0	1,090
美術・工芸	56	12	37	(55)	143	653	901
そ の 他	2	4	4	(2)	0	0	10
計	2,094	89	235	(2068)	577	998	3,993

複製には模型・ジオラマを含む（昭和55年3月31日現在）

1. 資料寄贈者芳名一覧（敬称略・順不同）

資料名	点数	芳名
隆起線文深鉢復原縄文土器 （新潟県馬高遺跡）ほか	21	武馬 正敏
行灯・ランプ・箱枕ほか	46	富野小学校
愛国婦人会たすき ほか	7	平光 軍一
すり石・石斧ほか	3	川村 義澄
岩手竹中家文書 （延宝5年田地取高覚）	1	直井長次郎
壺形土器（16世紀）	1	岩見又二郎
水車、手押除草機ほか	5	赤地 博
英文タイプライター	1	県立図書館

2. 実物資料の購入

刀 銘濃州赤坂住兼元（室町時代）	1口
志野茶碗（荒川豊蔵作）	1点

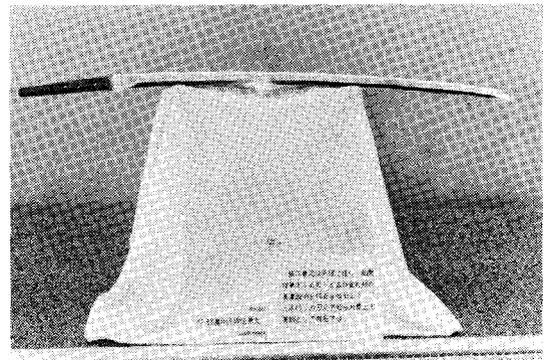
3. 複製資料の製作

触察資料 古墳時代武装男子埴輪（埼玉県 児玉郡出上）ほか	日博協幹旋 12点
先土器時代の石器（西坂・赤土坂・ 日吉神社・恵日山遺跡等出土）	1組
木造延命地藏菩薩半跏像 （下呂町地藏寺所蔵）	1点

館蔵資料紹介

- 刀 銘濃州赤坂住兼元（長さ2尺4寸5分5厘、
反り6分、目釘穴3個）

本資料は、俗に関孫六・三本杉の名称で世間に知られておるものであり、製作年代は室町期である。この時期は全国的に美濃が最も刀工数が多く、戦国乱世以降の刀剣の需要に応じて、数打物（かずうちもの）東刀（たばがたな）と呼ばれる量産が行われた中でも、孫六兼元は和泉守兼定と並んで著名な鍛工として入念な作品を残している。



初代孫六は、通称であり、正しくは2代兼元のことである。赤坂に住して製作したので、銘は「濃州赤坂住兼元」と切られている。

2代兼元の特徴の1つは、彼の創始した刃文にあって、互の目乱れが尖っているために三本杉といわれているところにある。この三本杉は、代が下がると尖り形が鋭角的で規則正しくなるが、本資料のような初期の孫六は、刃文の三本杉が必ずしも鋭角的ではなく、頂点が丸みをおびた柔らかみがあり、刃文が画的でなくて、帽子が地蔵にかかる場所が見どころである。兼元のもつ一つの特徴は、その切れ味にあるといわれている。地肌に白気ごろごころがあって、これがいかにも地がねの強さを示しているようだ。古川柳には「孫六は婿引出にはよい刀」と歌われているように文字通り子孫繁栄の縁起刀とされているが、桜田門外の変での井伊大老の首をはねたのは関の孫六であるとも、或いは地蔵を真二つにした「地蔵切兼元」ともいわれて、実際の作品そのものは斬れ味抜群の大業物（おおわざもの）として知られる幾つかのエピソードをもっている。

本資料は上に述べたような初代孫六である2代兼元の典型的な作風を有しており、銘の切り方が細めのところから恐らくは初期のころ（永正年間）の作品と思われる。当館が関市に所在している故もあって、刀剣コーナーは常設として力点をおき、年間4回のシリーズ展示を実施しており、こうした地元に関係の深い実物資料を購入することは、当館の館蔵品の象徴的な意味あいからいって喜ばしいことである。

●木造延命地蔵菩薩半跏像（像高39cm 像幅23.5cm）

当館は仏像の複製に当たっては、仏像の形態により大別して如来・菩薩・明王・天部の各分野のものを製作する計画をもっているが、菩薩像の分野ではこれまで観音像を製作したのについて、昭和54年度には、現在多くの庶民に広く親しまれている地蔵菩薩像を製作することにした。

地蔵菩薩は一般には、釈迦入滅後、弥勒菩薩がこの世に再来して救済にくるまでの長い間、無仏の現世にとどまって衆生を教化し救済するものだといわれ、我が国では平安時代の中ごろより末

法思想とともに広く信仰されるようになり、庶民の生活に密着した行事（地蔵講・地蔵盆）なども行われるようになった。そのためか、路傍の石仏には多くの地蔵菩薩を見かけるが、その姿はすでに仏陀の資格を得ているけれども、衆生救済のために仮に僧侶の形をとっており、頭も髪の毛をそった坊主頭である。そして、左手に宝珠を持ち、右手に錫杖を執り、粗末な衲衣をまとった立姿或いは座像が多い。

本資料の原像は、温泉街から東南方の静かな山里の下呂町宮地地内にある地蔵寺の本尊として崇拝されており、昭和46年県の指定を受けている。

本像は、路傍で見かける通学の地蔵菩薩像と異なって寄木造、玉眼、全身総金色彩であり、衲衣には唐草花紋様が施されており、製作年代は室町期にさか上ると推定されるが、時代の古さの割に図柄や金ばくも鮮明である。そして、おおらかにして慈愛に満ちた顔容は、いかにも衆生救済の地蔵菩薩にふさわしい感じを与え左足を垂らした半跏座像であるところも異色であろう。更に、この像を運台からはずして上にあげると、すっぽりと中から胎内仏（像高12cm）があらわれ、これは本尊に類似した総金色の地蔵菩薩座像である。本像の製作等によって当館の仏像資料も増加しつつある。今後の展示内容を一層多彩なものにしていきたい。



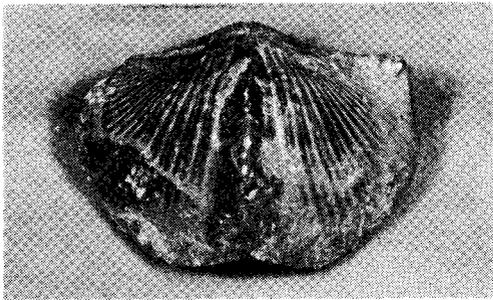
(2) 自然部門

	館 蔵				借 用	寄 託	計
	実 物	複 製	そ の 他	寄 贈			
動 物	9,790	15	100	(6,610)	15	0	9,920
植 物	1,852	25	167	(1,551)	0	0	2,044
岩石・鉱物	1,055	5	72	(334)	20	3	1,155
化 石	1,300	29	17	(776)	49	14	1,409
そ の 他	87	22	132	(45)	0	0	241
計	14,084	96	488	(9,315)	84	17	14,769

複製には模型・ジオラマを含む(昭和55年3月31日現在)

1. 寄贈者芳名一覧

資料名	点数	芳名
ネオペタロダス (ペルム紀のサメの歯)	2	村田 正文
ペタロダス (石炭紀のサメの歯)	1	〃
マガキ(二枚貝化石)	1	大谷 邦雄



パラスピリファー(腕足類化石)	1	長屋 政秋
シルトスピリファー(腕足類化石)	1	〃
ニホンカモシカのへい死体	2	下 呂 町
アユ生活史液浸標本	1	駒田 格知
ウグイ生活史液浸標本	1	〃
オイカワ生活史液浸標本	1	〃
キロスズメバチの巣	1	可児 孝子
アフリカマイマイほか	24	安藤 義雄
ウズラガイほか	46	松尾 良克
オオナルトボラほか	121	大垣内 宏
オカチヨウジガイほか	9	宮崎 惇
ノゴマ	1	高田 武

(敬称略・順不同)

ホンドテン	1	山田 孝弘
トラツグミ	1	角竹 弘
ジョウビタキ	1	佐光 勲
シロハラ	1	岡 堅一
馬の右下顎臼歯	1	日野 和正

2. 常設展示資料の購入

○巻貝化石(大垣市赤坂産)

赤坂金山から産する海生動物化石は古くから多くの種類が知られている。当館常設展示においては「ペルム紀の海」コーナーでこれらのうち代表的な種類の化石が展示してある。ここへ巻貝の中でも一個体のみ産出が知られているもの(マーチソニア)が加わった。

○片麻岩(吉城郡河合村元田産)

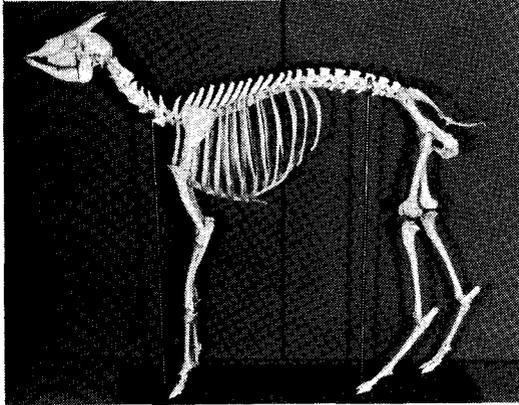
岐阜県北部にひろがっている飛騨変成岩類の中には多くの種類の片麻岩が認められている。ここに登場した標本は一見花崗岩に類似したもので、有色鉱物は角閃石、無色鉱物は石英、長石類よりなる。全体として粗い片麻状組織を呈する岩石で、より典型的な標本といえる。

○頁岩(本巣郡根尾村樽見)

頁岩は粘土又は泥質物を主体にした堆積物からなるため分布や量は多いにもかかわらず意外に良質の標本が得にくい。幸いトンネル工事によって新鮮な頁岩の標本が得られたので今回展示替えをすることができた。この標本は美濃帯中・古生層の代表的な黒色頁岩で、全体として塊状であるが、剝理面はよく認められる。

○ニホンカモシカ（益田郡下呂町産）

カモシカは「生きた化石」と呼ばれ、昭和30年に国の特別天然記念物に指定されている。



当館では、国が行った「特別天然記念物カモシカ保護捕獲事業」のおりに捕獲され、下呂町で飼育中に死亡した2頭を譲り受けた。これらを専門家に依頼し、1頭は剥製標本、他の一頭は骨格標本とした。現在、自然展示室Ⅱには幼獣が展示してあるが、今後、ここで製作した成獣と展示替える予定である。

3. 化石資料の調査収集

根尾東谷川の流域では電源開発の土木工事がはじまっている。一方この地域の古生層中からはこれまで知られていなかった頭足類をはじめとする化石が最近相次いで発見された。そこで今年度の調査収集は土木工事などで失われる化石資料をできるだけ保存し各方面への利用を考えるべく計画された。今回は時間の都合により初鹿谷流域、岩井谷南方、東谷川中流の各地区にしばって調査した。作業は東京大学浜田隆士教授の指導により実施したが、初鹿谷においてはあたらしく大型サメの歯を発見、また東谷川中流では謎の化石シカマイアの大型標本を採取するなどの成果を得た。その他おもな収集資料はフズリナ、オウム貝、ウニのトゲなど約100点であった。

4. 常設展展示構成充実準備調査

○岐阜県内産帰化植物の資料収集、及び、環境のちがいと帰化種の侵入状況の生態的調査（実施地域——各務原市内・御岳山麓）

写真撮影による写真資料の収集

○飯沼愨著「草木図説」及び未刊行植物図等についての文献調査

○南知多沿岸の海産貝類の資料収集、及び、その生態調査

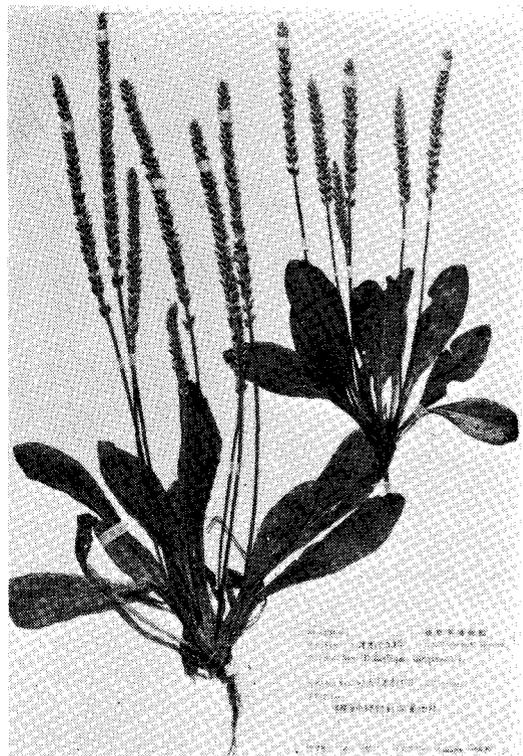
○岐阜県関市小屋名百年公園内の昆虫の採集及び、生態調査

○岐阜県荘川村北部地域の濃飛流紋岩類の火山層序についての調査

○岐阜県国見山東方地域の大雨見山層群の分布層序に関する調査・収集（前年度より継続）

○岐阜県烏帽子岳北方の火山岩についての調査収集

○活断層、特に岐阜県下に関するものについての文献調査（指導者—東京大学地震研究所松田時彦教授）



5. 教育普及活動

広報については、「くらしと学習」(GBS-TV)「県政ロビー」(GBSラジオ)等の放送、及び新聞、それに「くらしと県政」「くらしと学習」「教育広報」等の広報紙を活用した。更に岐阜市内の地下道3カ所、及び十六銀行柳ヶ瀬支店のショーケースを利用して、特別展のPRを積極

○ 映 画 会
特別展等の開催期間中の日曜・祝日、また夏休みは毎日、午前と午後の2回にわけて映画会を開催した。上映映画は展示にかかわるものを中心

的にすすめた。

出版物は前年同様「博物館だより」(年3回)館報、展示案内等を刊行したが、新しく「調査研究報告」を発刊した。

館内外の行事は、新たに「人文教室」「自然教室」を加えるなど、種類と回数を増加した。その概要は下記のとおりである。

に、広く文化財を紹介するもの、生徒・児童が見ても興味を引くものなどを選んだ。その題名と観覧者数は次のとおりである。

期 間	題 名	観覧者数
第1期 (4月27日～5月27日) (日曜・祝日)	古代の美 縄文遺跡をたずねて 大昔の生活 日本の古墳 ふるさとの歴史をたずねて 市原土人形	2,071
第2期 (7月21日～8月31日) (ただし月曜は除く)	琉球の自然 大珊瑚礁の生物 木の一生 あゆ 雷鳥 寒天の里 ふるさと岐阜 教育百年 ルーブル美術館	1,631
第3期 (10月12日～11月14日) (日曜・祝日)	岐阜県の文化財(美濃編) 同(飛騨編) 同(濃飛をめぐって) 長良川 パンダのふるさと 梁川星巖と紅蘭〔スライド〕 村瀬藤城と秋水〔スライド〕	1,752
第4期 (3月1日～30日) (日曜・祝日)	野原へいってみよう おかしなおかしな星の国 帰化植物〔スライド〕 帰化植物の生態〔スライド〕	1,460

○ 自然教室

6月17日(日)

本年度はじめて1日講座として自然教室を開催した。当館の自然展示室1のテーマ「郷土の自然とおいたち」の中から演題を選び、三人の講師がスライドや実物資料を使って解説した。

- ① 日本最古の岩石をめぐって——上麻生礫岩のなぞ—— 名古屋大学理学部助手 足立守氏
加茂郡七宗町の飛騨川沿いにみられる上麻生礫岩中には、今から約20億年前(中期先カンブリア時代)の変成岩がよく円磨された礫として存在する。この日本最古の岩石などによって今から約2億年前の岐阜県付近には北方の島列をひかえた海があり、その島々をつくっていた岩石は先カンブリア代に大陸の一部となっていたものであろう。
- ② 美濃山地にナウマンゾウがいたころ

美山団体研究グループ代表 奥村潔氏
郡上郡八幡町美山地区の熊石洞は洪積世の哺乳動物化石を産する。そのうちナウマンゾウ・オオツノジカは中国大陸の黄土動物群にあたり、温帯

から亜寒帯の森林草原性の動物である。またヘラシカは現在カナダ・アラスカ・シベリヤの針葉樹林帯で生活している、亜寒帯から寒帯の森林性動物である。熊石洞産の哺乳動物化石の時代は放射性炭素による年代測定の結果、およそ16,800年前、すなわち洪積世後期末であることがわかった。これらの化石から当時の郡上一帯は、現在より相当寒い亜寒帯的な気候下で、比較的ひらけた高原状の地形を呈し、草原とその周囲に針葉樹を主体にした森林がひろがっていたと考えられる。

③ 飛騨山地における白亜紀末期の火山活動

当館学芸員 笠原芳雄

白亜紀後半(約1億年前～7,000万年前)には岐阜県の各地で激しい火山活動がおり、その噴出物は現在県土の3分の1をおおっている。この活動は陥没運動にはじまり、酸性貫入岩の逆入で終ること、その間に生じた湖盆への堆積層の形成などを伴う火砕流を主とする噴火であることが明らかになった。

○ 体験学習会 「土人形の色付け」

8月10日（金） 講師：後藤久美〔市原土人形〕

対象：小5～中3 参加者数：46人 ほかに父兄29人

昭和54年度は戦前まで三月節供の雛人形として親まれていた土人形をテーマに選んだ。学習会のねらいは土人形づくりを通して子供たちに祖先の生活の一端をふれさせるとともに、そこに込められた素朴な心を少しでも感じてもらうことであった。子供たちの生き気ある、熱心な製作態度からして、その目的は幾分なりとも達せられたと思う。

以下、この体験学習会の概要を記す。

- ① 10時開始。館長あいさつの後、趣旨等を説明。
- ② ひなまつりについての解説……当館学芸員が手引書を利用して、土人形が使われた昔のひなまつりの様相をわかりやすく紹介。
- ③ 映画「市原土人形」を鑑賞……土人形の製作工程等を見ることで、学習意欲の高揚を図る。
- ④ 土人形の飾りつけ……人形を直接触れたことで製作意欲が一層高まり、また、講師とともに行ったことから、講師への親近感が深まった。
- ⑤ 白生地づくり……材料の土を人形の型に詰め込む。乾燥を待って上を型から取り出し、表と



裏を泥水で貼り合わせる。

- ⑥ 午後1時から土人形の色付け……各自素焼の人形（流し込みによるもの）に彩色。
- ⑦ 反省会……優秀作品を選定し、賞状を贈る。そして講師及び館長からの「我々の身近にも素晴らしい文化遺産のあることを認識するとともに、それを守り育てることを心がけるように。」との言葉で午後3時半に学習会の幕を閉じた。

○ 標本の名前を調べる会 8月26日（日） 講師：井波一雄（植物）堀義宏（昆虫）及び当館学芸員

当館としては初めての催し物でもあってか参加者の絶対数は少なかった。それだけに参加者自体は、指導の先生方と、直接いろいろ話し合え、生物の生態・形態について、採集時の注意・標本作成の技術等についてまでじっくり質問したり、指導を受けることができた。

参加者の実態は、

植物関係 20人（小学校1年生1人、2年生6人、3年生2人、4年生1人、5年生6人、6年生4人）

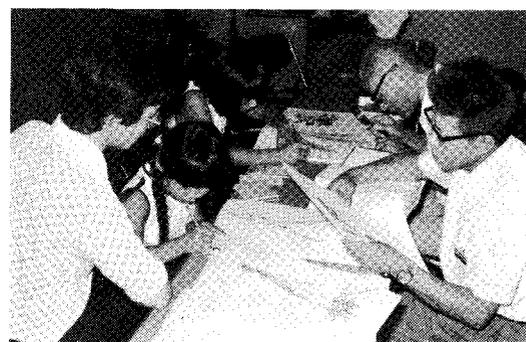
昆虫関係 5人（2年生2人、5年生3人）

岩石鉱物関係 4人（1年生1人、5年生1人、6年生2人）であった。

なお参加者の地域は、関市16人、岐阜市7人、武芸川町5人、武儀町1人の総計29人であった。

この催し物を通して感じられた問題点及び今後の課題としては、

1. 学校教育の場では採集標本作成の技術指導がほとんどなされておらず、単なるコレクション



的収集が目立ち、何のために採集するか科学的な視点が全くない。

2. したがって、博物館の教育事業の内容として、自然関係の標本の意義、採集のねらい、標本作成の技術指導などが大きなウエイトを占めるものと考えられる。
3. 自然史科学の理念にそった収集活動の広まりをめざすことが大切で、何の指導過程もない単なる「名前を調べる会」では意味が少ない。

○ 人文教室 11月3日(土) 講師:同朋大学教授 富長蝶如氏 対象:大学生・一般

参加者数:75人

特別展「濃飛の文人」の開催を記念して文人の素描及び詩文の解釈について公開講座を実施した講座の日程と内容は下記のとおりである。

- ① 10時に開会、館長あいさつ
- ② 10時10分より講座「美濃の文人」
- ③ 昼食後スライド観賞
- ④ 午後1時より再び講座「飛騨の文人」
- ⑤ 午後4時10分閉会

講座の会場は特別展示室で、参加者各自は椅子を移動させて受講した。主な展示作品を観賞しながら講師の解説を聴くのは効果的であった。特に、作品を通して幕末の文人の心にふれる解説は、受講者に感銘を与えた。また、解説に際して館が用意した手づくりのテキスト(書画略解、46頁)は参加者に非常に喜ばれた。これは、大垣文教之心発掘顕彰会の御協力を得て作成したものである。昼休みを利用して実施したスライド上映も好評で



あった。スライドは「梁川星巖と紅蘭」と「村瀬藤城と秋水」の2本で、いずれも館の製作によるものである。

反省としては特別展の図録がほしいという多くの方の要望に全く応じられなかったことがあげられる。

○ 自然観察会「百年公園の自然観察」

11月1日(日) 講師:当館学芸員 小野木三郎

対象:小5~中3 参加者数:30人

百年公園一帯は、アカマツ林を主とした丘陵地で、美濃平野部周辺の都市近郊の里山を代表するものである。谷筋には、コナラ・アベマキ等の雑木林もみられ、博物館をとりまく自然観察のこみちは、意図的に植樹されたいろいろな生活型の樹木も見られる。今回は、この自然観察のこみちと百年公園をめぐる、いろいろな森林のタイプを観察し、森林のつくり、紅葉と落葉の意味を知り、生態的な見方、考え方の基本に触れることをねらいとした。参加者は、記録作業の綴じ込まれた「自然観察の手びき」(6頁)を手に、2人の保護者も一緒になって、楽しい野外観察会となった。

当日の日程の概略は、

- ① 10時よりオリエンテーション・日程と会のねらい、百年公園の自然(スライドを使いアカマツ林の生態的位置づけ、その特色及び観察の窓の導入指導)の説明……研修室にて
- ② 10時35分より野外観察会……野外で昼食
- ③ 午後1時よりまとめの会(自然観察の手びき



の記録をもとに、樹形、アカマツの多いところと落葉樹の多いところの環境のちがひ、色づいた葉の形や大きさ・色彩のちがひ、人工林と自然林のちがひなどの話し合い)

- ④ 午後3時30分散。今後は四季を通じた観察会の回数を増やし、自然教育の実践を深めたい